

コシヒカリは茎数多く、葉色やや濃い。1 回目の穂肥は慎重に！

1 6月28日現在の稲姿

- コシヒカリの生育は、草丈短く、茎数は多く、葉色はやや濃く、生育はやや過剰傾向です。
- 出穂期は、高温の影響により1日程度早まり、8月4日頃となる見込みです。

【6月28日現在の生育概況：管内平坦地平均】

※()内は、測定値：指標値との比較

品 種	草 丈	茎 数	葉 数	葉 色(葉色値)
こしいぶき	短(47cm:90%)	並(515本/m ² :103%)	やや少(9.6葉:-0.6葉)	濃 (42.0:+4.0)
コシヒカリ	短(46cm:88%)	多(569本/m ² :115%)	やや少(9.8葉:-0.4葉)	やや濃(38.5:+1.0)

2 出穂予想と穂肥時期のめやす(6月28日現在の予想値)

【出穂予想と穂肥めやす】

品 種 名	出 穂 予想日	1 回目穂肥		2 回目穂肥		2 回合計窒素量 (10a 当たり)
		時 期	出穂前日数	時 期	出穂前日数	
こしいぶき	7/29 頃	7/ 6 頃	23	7/15 頃	14	2.0kg
コシヒカリ	8/ 4 頃	7/17~7/20 頃	18~15	7/25 頃	10	1.0~2.5kg
新 之 助	8/10 頃	7/20~7/23 頃	21~18	7/29~31 頃	12~10	2.0kg
みずほの輝き	8/13 頃	7/19 頃	25	7/30 頃	14	3.0kg

- ① 1 回目の穂肥は生育診断に基づいて施用時期と量を決定する。
- ② 栄養凋落を防止するため、2 回目穂肥は確実に施用する。

※稚苗5月10~15日頃、中苗5月15~20日頃に移植した場合を想定。

3 穂肥施用のポイント ~草丈と葉色で生育診断に基づいて適切に施用しよう!~

(1) コシヒカリの穂肥診断 ~生育調査結果を基に、穂肥時期及び量を判断しましょう~

【1回目の穂肥:幼穂形成期(出穂24日前頃)の生育による診断】

草 丈	葉色(単葉)	SPAD 値 32~34 葉色板 3.9~4.2	SPAD 値 35 以上 葉色板 4.4 以上
	70~75cm 以内	時期・量とも基準どおり施用 ■出穂18日前:1.0kg/10a	時期を遅らせて施用 ■出穂15日前:1.0kg/10a
75~80cm 以内	施用量を減らす ■出穂18日前:0.5~0.8kg/10a	時期を遅らせ、施用量を減らす ■出穂15日前:0.5~0.8kg/10a	
80cm 以上	施用不可	施用不可	

【2回目の穂肥:出穂12日前頃の葉色による診断】

出穂14~12日前の 葉色(単葉) ↓	出穂10日前の 穂肥量(10a 当たり)
SPAD 値 32~34 葉色板 4.2~4.5	基準量どおり施用 1.0~1.5kg
SPAD 値 35 以上 葉色板 4.6 以上	施用量を減らす 0.7~1.0kg 未満

※2回目穂肥は、後期栄養維持のため確実に施用する。

※全量基肥肥料であっても、葉色低下が見られる場合は施用する。

○出穂後好天による高温登熟が予想され、出穂期の葉色が SPAD 値で 31(葉色板 4.0)を下回ることが想定される場合は、出穂前3日に窒素成分で1kg/10a 以内を施用すると未熟粒が減少する。

(2) こしいぶきの穂肥診断 ~2 回目の穂肥を確実に施用しましょう~

【2回目の穂肥】

- 時 期 : 出穂14日前
- 施用量 : 1.0kg/10a ※ 低地力地域や後期栄養の不足が懸念される場合は、1.5kg/10a を施用する。

4 病害虫対策 ~斑点米カメムシ類の多発に注意!~

(1) 斑点米カメムシ類

一般的にカメムシ類の発生が多く、斑点米の発生が懸念されます。生息地となる畦畔・農道の除草を、早生品種の出穂前に確実に実施しましょう。出穂期以降もイネ科雑草が出穂・結実しない状態に雑草を管理しましょう。

(2) いもち病

予報によると7月の天候は、気温は高く、平年に比べ曇りや雨の日が多いため、いもち病に注意が必要です。葉いもちは見つけたい、適切に防除しましょう。

(3) 紋枯病

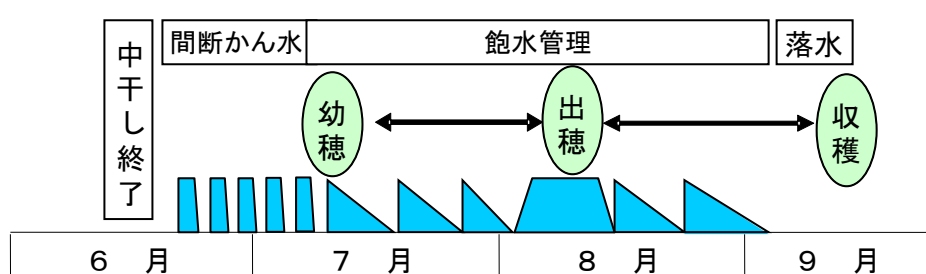
前年に紋枯病が多発したほ場では、伝染源となる菌核が多く、今年も発生が多くなるおそれがあります。そのようなほ場では予防剤の散布等、紋枯病の薬剤防除を適切に行いましょう。

5 水管理 ~極端な土壌乾燥に注意!~

(1) 中干しは出穂期1か月前をめどに終了し、以降は過度な土壌乾燥は避け、発根促進や根の活力を維持するため間断かん水および飽水管理を徹底しましょう。

(2) 最終かん水を出穂期から25日以降に行い、後期栄養の維持と、登熟後半の高温・フェーン現象等に備えましょう。

【図 中干し以降の水管理のイメージ】



間断かん水：湛水状態と落水状態を数日間隔で繰り返す。
飽水管理：水尻は止水し、自然減水で田面の水がなくなり、溝や足跡の底に水がたまっている箇所が散見される状態になったら、かん水する。

用水の確保が難しい地域では、幼穂形成期から出穂期前後は、最低限ほ場が湿っている状態を保ちましょう。